

漁業における歴史と民俗

——第四回常民文化研究講座（神奈川大学日本常民文化研究所二〇周年記念）より

第四回常民文化研究講座を迎えるにあたって

今年、財団法人日本常民文化研究所（以下、常民研と略称）が神奈川大学に移管されて二十年目に当たります。二十年を迎えてどういう企画を立てようかと考えました。常民研は、漁業あるいは海の世界の研究と民具・物質文化の研究の二つを大きな特色としてきましたし、そういう研究を神奈川大学が引き継いだ後も発展させていくというところが、財団法人常民研との取り決めの中にうたわれております。我々も、その取り決めに従ってそういう研究を進展させるべく努力をしてきたつもりです。しかし、大学の機関になったということで、構成員などの点で財団法人の時代とは条件が違ってきたということもあって、漁業や民具の研究以外の領域でも所員の様々な問題関心に従って研究活動全体が広がってきたという経過があります。

二十年といいますが、一つの節目、人間の一生でいえば成人式の年に当たるわけで、今後常民研の活動をどういう方向に発展させていくべきなのかを考える時期といえると思います。その意味で、きちんと過去を振り返って今後の方向を見定めるといえることが必要になってきたのではないかとということもあって、今年度は漁業を中心としたテーマで、来年度は民具を中心としたテーマで講座をもとうということを計画したわけではあります。

こういう経過をお話しますと、常民研の内部の事情によるテーマという印象をもたれるかもしれませんが。現在、日本の歴史・文化の研究状況を考えてみても、かつて常民研が、海の世界にもっと注目すべきであるとか、物質文化にもっと目を向けるべきであると問題提起をした時代に比べれば、はるかに前進したといえるとは思いますが。たとえば民具研究の世界では「民具学会」という立派な組織ができました。かつて、常民研が始めた「民具研究講座」から出発したわけですが、立派に成長して新しい学問の流れを作り出してきました。そういう意味では、常民研の問題提起が大きな刺激や影響を与えてきたと思います。

しかし、日本の歴史・文化研究の状況を全体的にみた場合、いぜんとして海の世界あるいは物質文化の世界についての評価は必ずしも十分とはいえない状況は続いています。したがって現在でも、常民研の伝統を大事にするということだけではなく、日本の歴史・文化の研究において、かつての伝統を踏まえながら新しい問題提起をしていく必要があるのではないかと思います。

そこで、まず、これまで常民研がどういう方法という問題意識で、漁業史の研究をしてきたのかを確認し、その確認作業の中でどのような残された問題があり、発展させるべき論点があるのかを考え、新たな出発の基礎としたいと考えております。今日、報告をお願いした先生方は、いずれも常民研とは深い関わりをお持ちで、漁業と海の村の民俗・文化に関心を持ち続けてこられた方です。

最初に講演する山口徹所員は、常民研の神奈川大学招致に力をつくし、招致後は長年所長として常民研を支えてきました。また、伊豆や房総を中心として漁業・海村の研究で業績をあげてきました。次に田邊悟千葉経済大学教授は、横須賀市自然博物館・横須賀市人文博物館の館長を長年勤められ、漁村の民俗や漁具の研究に深い造詣を持たれ、現在、民具学会会長として民具学会の指導的立場に居られるだけでなく、常民研を外側から支えてこられました。また、小島孝夫成城大学講師は、漁具や漁法の研究に詳しく、最近まで『民具マンスリー』の編集委員としてご協力してい

ただいていました。最後に、二野瓶徳夫元国会図書館専門調査員は、漁業史研究の先達のお一人であると同時に、常民研が水産庁の委託によって行った漁業制度史料調査を中心的に担われた研究所の大先輩であります。

今回の常民文化研究講座は、以上四人の方の講演・報告をいただくわけですが、先ほども申し上げましたように、漁業および海の世界についての研究の現段階を確認すると同時に今後の方向を模索する第一歩としようとするものがあります。意のあるところをお汲み取りいただければ幸いです。(小島孝夫氏の報告は、本人の都合により、今回は掲載できなかつた)。

(所長 橘川俊忠)